

海軍工廠勤務と

歩兵第二十連隊で中国へ

京都府 塩見輝雄

私は大正四（一九一五）年六月、戦後綾部市に編入になった京都府何鹿郡小畑村（現・綾部市小畑町）に生まれました。昭和五（一九三〇）年三月、小学校高等科を卒業し、卒業と同時に舞鶴の海軍工廠、当時は工作部と言っておりましたが、その工作部の見習教習所補修科に見習工として入り、以後四年の教習を終え、ようやく舞鶴海軍工廠に入廠、工廠従業員として勤務することになりました。

その後昭和十年、徴兵検査を受けて甲種合格となりました。昭和十年兵として福知山第二十連隊に入隊しました。小畑村からは徴兵検査に十八人行ったのですが、合格して入隊したのは三人だけでした。当時、福知山の連隊は留守隊を残して主力は満州警備に派遣さ

れておりましたので、私たち初年兵も入隊と同時に満州へ渡って行きました。

昭和十年十二月十二日、福知山出発、五日間かかって北朝鮮の清津という所に着きました。そして黒龍江省のトゥナンという所に第三大隊本部があり、連隊の主力はタイアンという所におりました。

当時気温が零下三〇度ということで、今でも当時のことを記憶しておりますが、このような厳寒地の中で五月まで厳しい初年兵教育を受けました。

しかし私たちは第十六師団で、この師団は三年前から満州へ来ていたのですが、例の二・二六事件で東京の第一師団が国内を非常に騒がせたということから、その第一師団が第十六師団に替わり満州へ派遣となり、我々第十六師団は六月には軍旗と共に福知山へ帰って来ました。

そして後一年、昭和十二年五月末日に帰郷除隊ということになりました。昔は青年学校教育を受けていると、通常二年勤務のところ半年短縮となって、一年半で除隊ということになり、帰って参りました。

これでやっと海軍工廠でまた仕事ができると思っておりましたが、昭和十二年七月七日、例の蘆溝橋事件が起こり、それが拡大して日支事変となり、せっかく工廠に復職したのですが、昭和十二年八月二十四日に召集令状を受け、三日後の八月二十七日に福知山連隊に再び戻ることになりました。その時は陸軍伍長でした。

私は第三大隊本部青木部隊と言っておりましたが、大隊本部付として配置されました。この第三大隊本部付の仕事は、部隊の行動、本部の護衛あるいは各隊との連絡に当たり、現地駐留の間は、大隊警備員の助手として主計のもとで食糧、嗜好品、衣料等の中隊への配給等の手伝いをしました。

昭和十二年九月十四日に大陸の一角の山東省の太沽港に上陸して、天津に向けて猛暑の中を行軍しました。天津の日本の居留民宅で一夜を明かし、翌日より早速、北支戦線へ進撃を開始したのです。

かくして北支戦線二カ月、ここで部隊は南京攻略戦参加のために十一月十一日、大連港を出港して一路南

下、十一月十七日、揚子江下流の駐留地に無血上陸し、南京攻略戦に参加しました。

我が第三大隊は無錫、徐州、漢陽と南京街道を西進し、南京にヒシヒシと迫って行きました。私は大行李の管理として、しばらく部隊を離れて行動しましたが、かくして南京攻略戦も大詰めとなって、ご承知の「日軍百万、既に江南を席捲せり」と投降勧告を出しました。ところが期日になっても何の回答もなく、十二月十日、最後の攻撃が開始されました。かくしてわが第二十連隊大野部隊の八中隊が十三日未明、中山門に突入し、その後青木連隊長代理は軍旗と共に南京に入城しました。そして、その四日後、松井石根司令官が入城式を行いました。これは日本にも大きく報道され、新聞の第一面を飾ったことをご存知のことと思います。

南京攻略戦を終えた部隊は、翌昭和十三年一月二十三日、揚子江沿岸の鎮江より出港しました。北上して、また大連に上陸、徐州会戦に備え、衝徳付近の警

備に就いたのです。かくして昭和十三年五月十九日、徐州陥落後は敗敵を追って西進、さらに敵を殲滅しつつ進軍しました。その時、我が第三大隊長・青木少佐は敵の狙撃により名譽の戦死を遂げられました。私もその時、側に付いておった訳です。戦いの常とは言え大隊長が狙撃で倒れるということは残念でした。

北支戦線は全く非衛生的で、雨露やクリックで体を冷やし、特産の梨で腹をこわし、昭和十三年八月末、急性腸炎、脚気ということで野戦病院に入院、十月半ばに退院し本隊に復帰しました。ところがこの野戦病院というのは名ばかりで、麿居となった中国の民家の戸を外して、その上に藁を敷きベットの代用としていました。当時大陸ではコレラが蔓延し、日本に帰る兵隊も随分いました。私の場合は、幸いにもコレラに罹患せずすんだのです。

昭和十三年の春、北支に駐屯していた時のことです。私が、私は大隊警備員助手として部隊駐留間は糧秣、嗜好品の各中隊への分配の補助を行っていました。副食

の肉類、野菜は可能な限り現地調達でまかなうのです。が、その調達日には多数の中国人が「治安維持隊」の腕章を着けて、列を作って納入品を大隊本部に搬入してくる光景を今も記憶しております。もちろんこれはある程度、治安維持の確立した地域のことです。戦闘中はそこらにあるものは、こちらで勝手に徴発して行っていました。

ある日のこと、中国住民側より当方警備担当者招いて、食事を共にしようとしたことがあり、私どもは、はからずも中国料理のごちそうにあずかったのです。兵隊は帯剣、下士官以上は拳銃のみでお招きに応じたのですが、このような戦地で、見知らぬ現地の人たちの供応は、人の心は決して地域によりあるいは人種によって異なることはないということを述懐しております。そして六十有余年経過した現在でも、心の中に深く刻み込まれ、今でも忘れることはできません。

この第二回の福知山連隊勤務も、昭和十四年七月に召集解除となり、海軍工廠復職しました。そして昭和

十九年九月に海軍技手養成所卒業、昭和二十年、終戦により復員局管業部に移籍しました。昭和二十一年四月には飯野産業舞鶴造船所となり、私は昭和四十五年十一月に定年退職、その後、舞鶴設計所入社、昭和五十九年五月に退職いたしました。

以上が私のわずか二カ年余りの日支事変従軍の体験ですが、この戦争に対し、戦後特に国の内外で大きく話題になった南京虐殺事件なるものがあります。それも当時第二十師団の福知山連隊が組上に上ったことです。このような風評の中で、我等従軍者も多少関心をもつての推移を見守っているのですが、戦後処理の動向の中で、関係者の高齢化で記憶も年と共に薄れ、従軍者の本件に対する関心も、おいおいと遠ざかっています。

このため平成二年、有志の提唱によって、遅まきながら「福知山連隊愛護会」が結成され、支那事変における福知山連隊の行動に関する真実を把握し、一部世上において流布された多量虐殺等の虚報を排除し、もつて郷土部隊の栄光を維持し、子孫に真実を伝える

ために、約一四〇人の委員で発足いたしました。当時、私も事務局長補佐・会計担当として末席を汚しておったのですが、その運営は当初の予想と異なり、なかなか至難なことでした。

かくするうちに平成四年春、会長が病気のため辞任の申し出があり、後継者もなく会の運営に関し協議の結果、多数決で、約二カ年半をもって解散することに決しました。

既に戦後五十五年、関係者も高齢により、その大半は死去し、残任者も記憶が薄れ、自然と関心が薄れつつあることを考えれば、これもまた致し方ないことかと思えます。なお、この「愛護会」解散に反対した一部の方が「追憶・愛護会」を結成して、これらの目的で続けておられたようですが、その後のことは不明です。

ともかく我々生き残りの従軍者として、かつての体験した実情を、やましき点がなければ堂々と子孫に正しく伝えておくべきだと思っております。

そして今、既に亡くなられた戦友に対し、心よりご冥福をお祈りしたいと思います。

青春を海軍に捧げて

愛知県 今泉 一郎

終戦後半世紀余も経過し、年齢も八十の坂を過ぎれば、記憶も氣力も共に薄れてきましたが、「三つ子の魂百まで」の例えに負けず筆を取りました。

私が小学校へ入校した頃は、銀行も休業する程の昭和の大不況（当時近くの鉄道一区間六銭が現在一八〇円）の時代で、経済も世界的恐慌の様相を呈していました。

以後、満州事変、上海事変があり、昭和十一（一九三六）年には政治面においても、二・二六事件があるなど悪化をたどり、遂に太平洋戦争へと突入してゆきました。その頃は多くの赤紙（召集令状）が各部落に届く事態となり、出征する者の武運長久を祈るため神

社参りをする団体行列がよく眺められました。国民皆兵の時世で、私はいずれは徴兵されるであろう、しかし体質上陸軍は苦手でしたので、一足先に海軍へ志願しました。満二十歳の徴兵検査も受け、甲種合格の通知があり、呉海兵団へ先に入ることになりました。

昭和十四年五月末、村人と小学校児童全員に、駅のホームで歓呼の声と小旗で見送られ郷里を出発しました。入団前日は、赤飯に果物付でごちそうの歓送会でした。一夜明けて六月一日、入団式が終わり、海軍四等機関兵の辞令と共に、今までとは一八〇度転換し、覚悟はしていたものの厳しい新兵教育が始まりました。社会生活に慣れた者には、言い訳の通らない絶対服従は納得できないものですが、日が経つにつれ次第に兵隊の型にはまってゆきました。

訓練は陸戦をはじめ、ボート、機関術等が詰め込まれた日課でした。ボートの訓練も、ベンシカ持たない手には水疱ができ辛いものでした。釜焚の実習で手に火傷をする人もいました。大掃除の甲板拭きも大変きつものでした。すべてが訓練というより、軍人精神